

(途上国)ビジネス人生の棚卸！

－人生110年時代(兼)生涯現役に向けて！－

河合 秀次

今回羅須地人協会／センタード通信に寄稿出来る機会に恵まれ、自身の棚卸も兼ねて、又自身の冥途の土産をも兼ねて(笑)、記憶を頼りに認めてみたい。

短期出張を除いて主として海外(滞在型)勤務の私生活面を中心に時系列で記載してみたい。

<01> インドネシア(1年半)



(1)海外で仕事したい一心で機会を模索していたが、就職3年目の初めに、インドネシアの Project に指名された。プルタミナ(国営石油公社)の高級住宅街の家に1室を頂き、その区域内にはスーパー、プール等完備し、生活には何一つ不自由なく全く困らなかった。

一方、仕事面では右も左も分からぬまま着任し、更に悲しいかな現場経験の無さで、先輩や業者の方々、客先等にもご教示頂きながら、何とか勤務を終えた。

全てが新鮮であり、若さが何よりの武器、と言う時代だった。今振り返ると本当に貴重な体験であったし、強心臓も味方した。

(2)イスラム教徒との付き合い方も覚えた。朝の4時頃に住居付近の電柱上?に設置されたスピーカーの大音響に叩き起こされ、それが続くと神経質な方々は、それだけで睡眠不足になる方も多かった様だ。

(3)旅行案内書には「イスラム社会では、左手はトイレ(大)の後を拭く不浄の手、右手は握手等の意思表示」と書いてある。そして、日々の生活では、連日の停電と断水に悩まされる毎日であった。停電するとジェネレーターが回るのだが、その大音響のうるさい事、人間様同士の会話が聞き取れない!

(4)ジャカルタで暑い日に会社からの帰路、社用車の窓を開けて助手席で左手(肘)を窓に掛けて走行していたところ、交差点の信号で停車中に少年が飛びついて左手から私の腕時計をむしり取った。痛みと凄惨な出血ですぐに手当てして事なきを得たが、その2日後、僕も警察に呼ばれて「犯人はこの少年だろう?」と言われた。その子は父親に連れてこられた様であった。顔から間違いなくその子であった。

時計も戻ったし、少年を責める事もせず1件落着!時計はくれてやった。あの時の男の子は今インドネシアの何処で、或いはどの国で何の仕事をしているだろうか?

(5)通勤帰りにも一つ事件があった。試しに社用車以外にも一般バスでの帰宅も経験だ、と思って市バスに乗ったところ、若い男達数人が自分のすぐ後ろに乗ってきた。僕の着席後、両脇から若者が僕をとり囲み、ポケットから小型ナイフを出し「金が欲しい」と! 周りの乗客は皆知らん振り! 直ぐに現金を手渡し、その場で決着! Happy end であった。金額は当時の金で5,000円程度だったと記憶。

やはり途上国では、「命金」と称して、5,000円～10,000円程度は常に携行するのが大切だと

先輩から教わったが、実践しかつ痛感した次第。

<02>2度目のインドネシア(1年)

(1) 今度は、スマトラ島最北端のアッチェ州、バンダアッチェ勤務、インドネシアでも一番宗教的戒律の厳しい地区と聞いた。現地調査時には、カマを持った原住民達に囲まれて何とも驚いた。

(2) ここでも停電や断水には頻繁に悩まされ続けた。3日ほど断水の後に、とある夕刻、超豪雨が来た時には、勤務時間中にも拘わらず、皆裸になって体中に石鹸を塗り、大雨による天然シャワーで大いにサッパリしたのをよく覚えている。

(3) 又職場では、インドネシア人と華僑系とが極めて仲が悪い、お互いに反目して日本人達を大いに手こずらせる。この仲裁が我々日本人の仕事上、かなりのウェイトを占めていた。そこである時以降、仕事の内容や座席も分けて「どうか仲良く仕事せよ。でないとどちらも首だ！」と言ったら少しは改善した様だった。

(4) 因みに、インドネシアでは大統領の3条件として、①イスラム教徒である事、②ジャワ島出身である事、③バンドン工科大学を卒業している事だと言われる。

以前はそうだった様であるが、最近はどうなのだろう？

歴代の大統領(スカルノ/スハルト/ユスフ・ハビビ/ワヒッド/メガワッティ/ユドヨノ/ジョコ各氏)は？ 時間ある時に一度調べてみたい項目の一つだ。

<03>エジプト(2年半)



(1) 3度目の海外で、北アフリカ・中東の機会を得た。最初の半年は単身赴任、後半2年は家族帯同。後にも先にも家族で赴任したのはこのエジプトだけである。

休暇では、ギリシャ、ドイツ、オーストリア、チェコ、ポーランド、米国、キプロスと羽根を伸ばしたのが記憶に新しい。又、地元のエジプトではピラミッドの中には3回程入った。あの中にはまだまだ未解明な神秘が沢山あると聞く。ピラミッドの記事や番組を見る度にエジプト時代を思い出し、とても懐かしい。

(2) 仕事上の会議では、被征服経験のある国ではどこも共通の様に思われるが、兎に角猜疑心が強い。会議の席上、日本人同士が少しでも日本語で話すと、「今、何を話した？」と訊いてくる。何か日本人同士の意見の違いや、事前の打ち合わせ不足を突いてくる様な感じがして当初嫌な気分だったが、何分、お金を頂く相手の土俵での戦い！と割り切って、事前に“Sorry, in Japanese”等を挟むとスムーズに会話が進み、その後はそれを活用した。

(3) エジプトではデスクワークの際、左手で書く人が多かった様に記憶している。日常生活は右利きの人でも、よく聞いてみると「アラビア語では文章を右から左に書く。インクが滲む為、右手で書くより左手で書く方が合理的」との回答に、当時は成程、と思った次第。今もそうだろうか？

(4) 何がキッカケで料金を頂く議論だったか詳細はどれも記憶が薄れている事がある。ある日、同僚のエジプト人との会話で「それなら電話料金ぐらい徴収せよ！」と言う。これに対し私は「それは料金を頂く訳にはいかんだろう！だって契約書には『料金を取っても可』と記載ないのだから」と私が言ったら、すかさず彼ら一同異口同音に、契約書に『取ってはいかん』と書いてないのだから

ら、取っても構わぬ。」と言い張り、頑として譲らず平行線のまま！

この発想が日本人にはない、足りない、弱い！ 結局、上司とも相談して(両者折り合って)今回は料金は取らない事で決着した。この辺も、日本人と彼らとでは大きな違いがあり、日本人は謙虚で礼儀正しく何かと「謙譲の美学」的な精神が先行する。一方彼らは「察しの美学」よりは常に「自己主張の力学」が優先し、取れる物は全部取り、或いは最低でも次の機会の取引材料(交渉要素)にはしてしまう！日本人も見習わぬと国際社会で対抗できなくなるのでは?? と常々危惧している。

(5) 上記場面を離れて一般論だが、彼らは組織の利益より自分のメンツだけを最優先にする。イスラム圏でのビジネス経験者なら誰しも遭遇(経験)する点だ。基本的に日本人は全くお人好し過ぎるのが欠点だ！

<04>リビア(半年)



(1) 北アフリカの地中海沿岸で2つ目の国だ。つい最近まで内戦の絶えなかった国で、勤務は首都トリポリから東へ 220km、ミスラタ製鉄所であった。その後、当該製鉄所は破壊されたと聞くが、もし本当なら全く寂しい限りである。当時のカダフィ大統領宅(と言っても広い敷地にテントが沢山あり、高さ4 m 程のコンクリート壁に囲まれ、監視カメラも縦横に設置。大統領がどのテントに居るのか全く分からぬ様になっている)の傍を通った。これこそ中東政治の原点か！

又、勤務先の構内パトロールでは、海岸(地中海)が美し過ぎて、暫し立ち止まって地中海を眺めるのが日課だった。ホッとするひと時であった。

(2) ある日、インド人スタッフが天井走行クレーンの真下をヘルメットも被らずにターバンだけ頭に付けて勤務していた。早速注意すると、「自分は絶対にヘルメットなどを被らぬ！」「では万が一、天井からクレーンや鉄骨が落ちて死んだらどうする?」「それでも構わぬ。死ぬ。ターバンを脱ぐよりマシ！」とハッキリ回答！ これには参ったが、結局コチラが諦めた。その後その場所では事故も起こらず何よりだったが。

(3) 又、Camp 生活は、韓国(サブコン)の人達と一緒にの食堂だ。朝から山盛りキムチでシッカリご飯を食べ、あれで活力を蓄える。私も見習って！朝からキムチをおかずで大飯を食べた。結局何一つ病気もせずに帰国出来た。キムチだけのお陰ではなかったかも知れぬが、3食連日必ず食べた山盛りキムチの景観と味とは今でも忘れ難い。

(4) 又、部品や工具の追加購入で、マルタ島に2泊3日出張した際、仕事を終えて時間が出来て、タクシーで島を一周して地中海の景色(特に夕日)を堪能し、又満喫した！イタリア民謡やカンツォーネがアチコチで流れていた。

<05>ガーナ(1年半)



(1) 西アフリカの大国であり、Sub-Saharan countries (サハラ砂漠以南諸国) 最初の勤務地。首都のアクラで生活出来たし、ほぼ自身専用の通勤車も付き、生活はし易かった。その昔、野口英世がアクラに渡り、黄熱病の研究をしているうちに、結局自身も黄熱病に罹り、亡く

なった地だ。

(2)特にこれといった産業もなく、全てが輸入に頼っている。でも日本ではもうなくなってしまった「暖かい何か」がシッカリと残っている。例えば職場でも街中でも、何かをうっかり落とすと、後ろの人が「コレ落としましたよ！」と言って必ず拾ってくれるのを何度も経験した。日本人仲間の方々もその経験をよく話題にする。

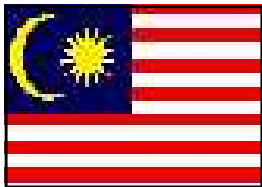
(3)離任間際には、会社のガーナ人スタッフ4名を連れて東の隣国トーゴへ2泊3日で旅行した。国境を越えるのに3時間程費やした。国境越えしてすぐの首都ロメでは、見かけはデラックスホテルだったが、やはり水が自由でなく濁った水が少量出てくるだけ。飲料水は必ずペットボトル。こんな所がやはり日本とは大違い、と痛感し社会勉強にもなった隣国旅行。私の運転手(ガーナ人)とその親族(トーゴ人)とが彼ら特有の部族語で会話していた。

(4)ガーナではこんな事もあった。サッカーの試合でガーナがどこかの国と試合しており、テレビで国内に放映された。会社から戻ると宿舎のリビング外側のガラス戸に顔をあてがって鈴なりの男達30名程がおり、皆目を皿のようにして自国ガーナをガラス戸越しに応援し、試合経過に見入っていて「お楽しみ中！」であった。

その中で誰かが「中に入れて見せてくれ」と言う。我々住人達は「今回限りで入れようか？」とも思ったが、ガーナ人の使用人達は「絶対に入れてはダメ。一度入れると味を占めて、次もまた中で、その次も中で見せろと言ってくるし物がなくなる」というものだ。心を鬼にしてお断りした、その後はその様な機会はなかったが、結局入れなくて良かったのであろう、と今も思っている。

(5)蛇足だが、日本人会の忘年会のノド自慢大会で、日本の歌謡曲をうたって優勝したのを今でもよく覚えている(大爆笑)。

<06>マレーシア(1年半)



(1)首都クアラルンプールの営業拠点勤務である。仕事も面白かったが、仲間内での頻繁な会合も忘れられない。ゴルフ、テニス、コーラスとほぼ同様なメンバーで本当によく集まったものだし、今でも交流が続いている。特にドイツ料理屋で、長靴みたいな大ジョッキで薫り高いドイツビールを飲みながら、ドイツ料理に舌鼓を打ったのも貴重な思い出だ。

(2)休暇ではクアラルンプールから列車でタイに向かって北上し、バターワースから連絡船でペナン島に行ってみた。小島で、丁度ミニ・シンガポールの様な雰囲気であり、有名な蛇寺も見学した。各国料理が揃っており2泊3日存分に楽しめた。

(3)息子(当時、高校生)が訪ねて来た時、2人で午後街中を歩いていた。と6名程の現地人が、我々2人の間に割り込んで入ろうとする。丁度、大きな交差点で信号が赤になった途端、一味の1人が私の前に背中を向けて立ち、「アーッ」と言って倒れ込んできた。病気？はたまた発作？と思い、両手でその男を支えた。その時は、全く気付かなかったのだが、一味の誰かが私のポケットにあった財布を(目にも止まらぬ早業で!)抜き取り、皆一斉に逃げ去った。

私はポケットの中身を取られたと気が付いたのは、同じ日のずっと後、数時間後だ！翌朝日本に電話して、使用 Stop を掛けたが、時すでに遅し！その一晚に日本円で何と25万円程も使い込まれていた。幸い、自身のカード引き去り銀行と保険対応銀行とが同じであった為、電話で全て片付いて、1円も被害に合わず全額保障！と事なきを得た。あの時は本当に助かった！けがも

全くナシ！不幸中の幸いとは正にこの事か？

(4)これに懲りて、この事件以降、海外旅行では先ず①基本、大金を持ち歩かぬ。②紙幣は靴底に忍ばせる。それも左右に分散して。靴下の内側も紙幣の保管場所としては慣れると重宝かつ安全だ。③パスポートや免許証のコピーは常に携行する(紛失や盗難の際、再発行に要する時間が短くなる)。但し原本はホテルで厳重保管。④ Credit card はコピーを別なポケットで持ち歩く、等々を心掛けている。

(5)ヨーロッパ旅行でもそうだが、先進国/途上国を問わず、ポケットに財布を入れてズボンが膨らんでいるのは、「どうぞ手を差し込んでそこから財布を、お金を抜き取って下さい！」と言っている様なもの。絶対に避けたいところ！

<07>チュニジア(2年)



(1) JICA のシニア・ボランティアである。緑のパスポートはこれが最初で多分最後？であろう。勤務時間的にも日本の会社に比べれば遥かに楽な方であった。お陰様でスポーツ以外にもコーラス活動も再開出来た。離任直前には有名ホテルの大ホールで日英両国の大使ご夫妻をお招きして、「日本の四季」と題して古い歌曲を(12か国程度から成る)多国籍合唱団 35 名を指揮して、自分も大いに楽しんだ。

(2)「日本の四季」とは(春から)「朧月夜」「早春賦」、(夏のイメージで)「夏は来ぬ」「我は海の子」、(秋は)「赤とんぼ」「もみじ」、(冬は)「冬の夜」「冬景色」の 8 曲構成。

更には、同じ演奏会で「花シリーズ」と題して、有名な日本歌曲から「花」(滝廉太郎作曲)、「花の周りで」「花の街」を披露し、皆で朗々と歌い上げて実に楽しかった！

(3)因みに、これらの楽譜は一時帰国時にマツメ買いして、歌詞にはローマ字で読みを付けて背景を説明し、歌う際には事前に意味や込めるべき感情を概略説明して何とかステージにこぎ着けた次第。

自身でも、その昔(吾等がテナー)藤原義江が歌った大ヒット曲「出船」、北原白秋作詞、山田耕筰作曲「からたちの花」の 2 曲をテノール独唱した。マアマアの反応(笑)！

<08>台湾(1年9か月)



(1)台湾第 2 の都市、高雄市での南北 345km に渡る新幹線業務である。当初は土日もなく、仕事、仕事に追われる日々だったが、次第に余裕も出来、街中を散策した。

連日仕事は極めてハードだったが残業も苦にならず、親日的でもあり「キツクテ大変だが楽しい」の一言だった！概して横柄なヨーロッパ人達に対しては、台湾人と日本人とがすぐに結束して対応出来た。ヨーロッパ人達には「自分達は鉄道先進国から指導に来ている。大きな態度で何が悪い！」と言わんばかりの人達が多かった様だ。

(2)運転試験では、スタッフを乗せて午後出発した列車が、信号故障で予定通り戻れず、や

っと基地に戻ったのが深夜になり、その無事(安否!)確認や食料買い出しに追われたのも今では楽しい思い出だ。帰宅が翌日になった事が何度もあった。



(台湾では居住マンションでも何かとお祭りが多い)

(3)高雄では、こんな事があった。毎年1月末から2月初旬にかけて、台湾では「春節」と称して10連休程度の休みがある。帰郷する人、首都で親族一同集まる人等々、いろいろな過ごし方がある様だ。

我々の運転試験事務所(高雄の郊外、田畑の真ん中!)には、事務所清掃スタッフがなかなか見つからない。やっと来てもらった中年のオバチャンが実に良い方で、連日一生懸命働いてくれた人気者だった。最初の春節では特にお小遣いは要求されなかったが、2回目の春節で「お金をくれないなら自分は辞める」と宣言して、鍵の束を床に放り投げて出て行ってしまった。さあ大変、彼女と仲良しだった年長スタッフ嬢(通訳兼務)に平身低頭して、そのオバチャンの家をコソコソ訪ねて貰ってご機嫌を取り、やっと職場に戻ってもらい、オバチャンと面接した。そして欲しい金額を正直に言ってもらい、その年長スタッフには部屋から退出してもらって、オバチャンと2人だけになった時に、言われるままの金額が入った封筒をポケットから出して手渡した。

兎に角ご機嫌を戻して貰い復職してもらわねばならぬ。その間5日間、事務所ゴミは皆さんにホテルに持ち帰ってもらい、大変な思いをしたのを覚えている。あのオバチャンは今どうしているだろうか? 因みに、その年長スタッフ嬢だが、その後僕には一切「オバチャンにいくら渡した?」とは問わず仕舞いだった。淑女的態度か?

それともオバチャンからコソコソ聞き出したか?

<09>カタール(約1年)



(1)エジプト、チュニジアに次いで3度目の中東勤務だ。日仏JV-Projectであり、Camp生活の食事が毎食豪華で美味かった。フランス人の美食ぶりに接し、これがフランス人(や欧米人)の通常の食事か?と驚き、かつ成程と思ったものである。Camp内のBarも立派で聖なる金曜日(かなりのイスラム諸国で定休日)には何と朝から営業していた。

業していた。

(2)金曜朝には海辺まで歩き、運動不足を補い、かつ気分転換にもなった。ペルシャ湾の眺め(特に朝日!)は最高に素晴らしかった。

インド人やフィリピン達人の採用や労務管理が重要な仕事だったが、類似(酷似!)の名前が多いので名前を覚えるのに大変な苦勞をしたものである。

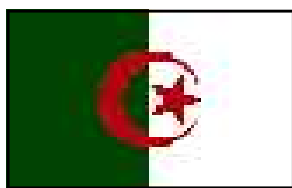
<10>シカゴ<2か月>

(1) 珍しく先進国勤務である。日本にある溶接ロボットを一旦解体して、機械部品の集積とした後、輸出してシカゴ郊外の現地工場で見直し(再現)する Project だった。

(2) 工場が通常稼働する日は、朝3時頃起きて4時から作業で、朝方から午前中は中断して午後再開、といった不規則な日も多く、大いに疲れたがそれなりに楽しめた。

(3) 休日は少なかったが、シカゴ川の遊覧船で、両岸の景色を眺めながらビールを飲んだ。帰国時には飛行機がかなり遅れた為、降り際に US30 \$ 程度の食券が乗客全員に支給され(3時間以上の遅延が対象?)、乗継ぎ空港でシッカリ楽しく飲食出来たのを記憶している。

<11>アルジェリア(何と6年も！)



(1) 東西 399km の高速道路 Project を鹿島/大成/西松/ハザマ(現安藤ハザマ)・鉄建/伊藤忠の6社連合で受注した。僕自身は伊藤忠商事のメンバーであった。

最初の1年半は本部 HQ と称して6社連合の拠点に、後半4年半は第5 Camp.(大成の拠点)に勤務した。

(2) 何と言っても6年間の Algerian life ! 我が青春の(否、人生の)金字塔でもある! ともしれば、味気なくて殺風景の一語に尽きる Camp 生活だったが、仲間うちの皆さんのお陰で本当に楽しく過ごせた。

テニス以外にも、数十年途切れていた卓球(中高校部活/後述)を、経験者にお声掛けして募り再開出来た。定休日の金曜日には<午前テニス、午後卓球>で必ず体を酷使して皆で大汗をかき、勝ったり負けたりで楽しく過ごせた。大汗後のビールがまた最高!



(Algeria の温泉地/温泉卵が有名)



(Camp 自室/ 40 ft コンテナの半分)



(Toyota をもじって、To を For に、Foryota 車/何度も見かけた)



(完成間近だった高速道路)



(私の送別会直後に皆で記念撮影①)



(送別会直後の記念写真②)

(3) 2013年1月16日、同国・内陸部の砂漠地帯のイナメナスで起きたテロ事件で犠牲になった10名の日本人の方々には本当にお気の毒であった。

丁度そのテロと同じ時、僕は高速道路 Project で Algeria の北海岸地帯スキダで勤務中。テロ事件の事は1時間程後にテレビで知ったが、これが同じ国で本当に起きているのか！と素朴な疑問を持つと同時に、連日恐怖感で一杯だった。

僕は今でもこの1/16当日はテレビに向かって黙祷を欠かさない。

(4) 犠牲者の中には、我々の Project からイナメナスに転勤された方もおられて啞然とした。ただもうご冥福を祈るばかり。休暇帰国時に、事件のあった会社(横浜)に花束持参で出向き、ご冥福を祈ったものである。

(5) ついでに申し添えるが、私は今でも年7日、テレビに向かって手を合わせるのを欠かさない。上記1/16 (Algeria テロ)、1/17 (阪神淡路大震災)、3/11 (東日本大震災)、8/06 (広島) 8/09 (長崎)、8/15 (終戦記念日)、9/11 (ニューヨーク同時多発テロ)、の7回である。

(5) パリの空港へは Algeria 往復時に何回も通った。特に休暇で一時帰国の際にはアルジェー→パリ間を1便繰り上げて、パリで5~6時間程時間を捻出し、サッと市内に繰り出し、シャンゼリゼ通り、美術館、エッフェル塔、北駅周辺の雑踏、(簡易)テント食堂で味わう牡蛎・ムール貝等々を一寸だけ楽しんだ後空港に戻り、日本行きの夜行便に搭乗して何か得した気分を味わえたのを今でもよく覚えている(笑！)。

<12> 2度目の台湾(前回と同じ1年9か月)

(1) 今度は、国際都市で首都・台北市での勤務である、会社へも地下鉄通勤が便利で、Door-to-desk でも20分程度だった。10年前に勤務した時のメンバーがかなり残っており、私を覚えていてくれる人も多く、仕事自体はやり易かった。

(2) 日台の歴史上、負の遺産として2度の霧社事件他もあるが、概してご存知の如く、極めて親日的であり生活も楽しかった。有名な蒋介石の眠る中世祈念堂、孫文を祀った國府記念館等々、何度も訪問した。休日にはガイドブックに記載なき場所も回った。

(3) 台湾人同僚から「もう河合さんは日本統治時代の名所旧跡は訪ねましたか？」とよく聞かれた。韓国の歴史には、嫌いな言葉だが「日韓併合」という言葉が厳存する。多分この言葉は日

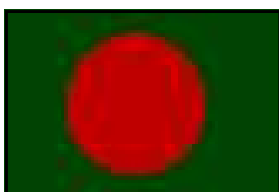
韓の歴史から消滅しないであろう。一方、台湾との間では上述の如く、「日本統治」なる言葉は存在するが、「日台併合」なる言葉は存在しない、聞いた事もないし、絶対にあつて欲しくない。



(新幹線延伸 Project 完成式典)

(有名な台北 101 / 高さ 501m)

<13> バングラデッシュ(1年3か月)



(1) 35 ~ 40 年程前に出張で何度も行ったが、駐在勤務は初めて。予想に違わず首都ダッカは超大発展を遂げており、高層ビルやマンションが林立している。都心のビル街を思わせる。一方で庶民の生活は昔と全く変わっておらず貧富の差は拡大の一途である。

(2) 宿舎から事務所までは僅か 15Km 程で、普通なら 20 分以内なのだが、平日の、特に夕刻は 2 時間以上かかることもザラ！でも事務所や宿舎の Local staff 達が概してよく働いてくれた。日本人不在となった現地事務所を今でも守ってくれている。時折メール交信している。つい昨日の事のように懐かしく、是非再訪したい。又、テニス仲間とも今も交流が続く。

(3) 業務上調べたいいくつかの病院には本当にお世話になった。特に「山形ダッカ友好記念病院」のラーマン院長先生は山形大の卒業生で、東北大には親近感をお持ちだった様で、とても良くしてくれた。同僚の腰痛がひどく、本人が入院を拒絶する中、私とラーマン先生、日本人看護師(小林さん)の3人で連携して何とか入院させよう(入院して頂こう!)と説得して 1 泊してもらい、かなりの治療で回復したのをよく覚えている。入院生活の食事もその小林さんのお陰で「美味かった!」とご本人談。

又、僕の筋肉痛などにも助言を頂き、その薬(及び類似品)はいまも時折服用する。海外では誰にお世話になるか本当に予想がつかぬものである。



(完成式後に同僚らと)



(列車の屋根に鈴なりの無賃乗車)



(テニス仲間達と)



(昼食会／右手で食べるのが基本)



(乗り継ぎ空港／中国の廣州)



(ダッカの路上に人を乗せた像が！)



(山形ダッカ友好記念病院)



(先生方と)



(事務所スタッフの3人娘と)



(スタッフの結婚式)

<14> 岡山県美作市(4か月)

(1) 太陽光発電の仕事で、2019年6月～9月まで日本の岡山県で過ごした。

こんな長い国内現場勤務は初体験！真夏の炎天下作業は、連日熱中症が頻発したが、何とか勤務を終える事が出来た。僕自身最年長でもあり、皆さんとても気を遣って下さったお陰で何とか生還できた、皆さんには本当に感謝あるのみ！

<15> パプアニューギニア(6か月)



(1) 某(機械インフラ)専門商社から直接のお話しを頂いた。これといった産業は特になく LNG が出る様だ。又、海が綺麗で日本からもダイバー達が年間 2,000 人から 3,000 人規模で訪れる国だ。

(2) 本来なら 2020 年 2～3 月には現地に赴任していたはずなのだが、例のコロナ禍で結局、2020 年 12 / 15 (火) に成田発するも、首都ポートモレスビー空港付近の隔離ホテルで 2 週間の収容所生活を余儀なくされた！ 部屋の外へは一步も出られない！ 食事は 1 日 3 回部屋に運ばれてくる。本稿は正に Papua New Guinea 入国直後、その大半を隔離期間中のホテルライフで仕上げたもの！

(3) 離日前日に都内で PCR 検査を受診した。鼻から綿棒を入れてくすぐられる感じ。綿棒が次第に奥に入り、かなり痛みを感じた。夕刻に結果も判明して陰性、ホッ！

無事成田発となった次第！

<16> 都内某私大・留学生寮の管理人(1年2か月)

パプアから帰国直後、ご縁があり紹介して下さる方がいて住み込みで仕事を始めた。

各国の留学生がいて英語は少しは活かしたが、ゴミの捨て方、コロナ禍でのマスク着用義務等々お願いや依頼事項も多く、何かと苦勞も多かった。結局自由時間優先で 22 年 7 月末で退職。

<17> 蛇足-1: 生涯スポーツとしての「卓球」



(1) 中高校時代、部活で卓球に明け暮れた。インターハイや国体等の県外試合には出られず、いつも予選落ちだった。それでも茨城県の中・高校生強化合宿には何度か呼ばれて他流試合も経験した。その合宿では

都内の大学生達と打ち合う機会に恵まれたのだが、先ず打ってくるボールの質が全然違う、重い！鋭い！相手が渾身の力で打ってくるボールには自分のラケットが全く当たらなかった(触れさえせず！)経験が今でも鮮明に残る。

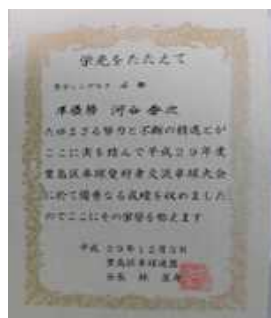
(2)数十年のブランクはあったが現在も何とか時間を捻出しては、地元卓球仲間達と皆で大汗をかいている。以前は Minor sports であった卓球も次第に Major 化し、今では競技人口もかなり増えている。あの福原愛ちゃんが出た頃、勝っては泣き負けては泣き(失礼！)の愛ちゃん精神(愛ちゃん Style ?)に日本中が感動し、スポーツファンを席卷した。彼女がリオ・オリンピック後引退するまで全国民が一斉に応援し続けた。

あの愛ちゃんが台湾の卓球選手と結婚した際、中国の全「愛ちゃんファン」が皆残念がったというエピソードもある程だ。これを機に、中台両者が卓球(ピンポン)外交で仲良くなれぬものか??

彼女の功績は大きく、若年層も着実に育っており、早く打倒中国を実現して欲しいものだ。

(3)一方、僕自身も5年前に居住地区(豊島区)の大会で高校時代以来、実に半世紀振りに頂いた賞状を添付(爆笑！詳細略)。

因みに、僕自身の卓球への夢は、80代で東京チャンピオン、90代で日本チャンピオン、100歳代で世界チャンピオンになる事だ！(大爆笑！)



<18> 蛇足-2: 合唱活動



(1)幼少の頃から音楽には慣れ親しんだ。確か高1でピアノは止めたと記憶。

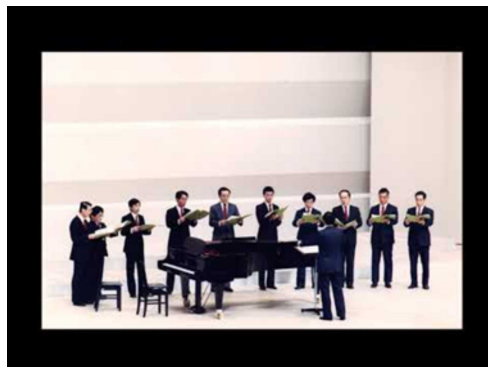
就職以後、市内や会社の合唱団に所属して歌いまくった。年末の「第九」には毎年参加して参加回数もずっと数えていたが、途中で面倒になり、数えるのは止めてしまっ

たが、大体30～40回程度はステージに立って歌ったかと思う。

(2)又、大曲かつ難曲とされるレクイエム(鎮魂歌/死者の冥福を祈る挽歌)では、3大レクイエムとされるベルディ、モーツァルト、フォーレは何度も歌ったし、その他にも、ブラームス(ドイツ・レクイエム)もステージに乗った。

(3)最近ではコーラス活動の方はこのコロナ禍の為に遠ざかってしまい、寂しい限りである。現

実は日本中のコーラス団体に、殆ど(全て?)活動再開の見込みすら立っていない様だ。一日も早く復活し、以前の様に皆が歌える時代が戻って欲しいものだ。



<19>「比較途上国学」なんてあっても良さそう！？

こんな学問名はついぞこの方聞いた事ないが、上記の如くアチコチ歩き回れたお陰で、雑学だけでもついつい比較したくなるのが人情か？ 好奇心か？

例えば、中東・アフリカ諸国のモスLEM(イスラム教徒)達はやはり地理的にも歴史的にも、目と関心とが自ずと英独仏に向いてしまう。一方、アジア諸国のモスLEM達は、例えばマレーシアのマハティール首相が提唱した近代化促進 ” Look-East ” 政策で、日本を大いに **Respect** してくれている。

<20>もう一度生まれ変わったら？？

最近よく「今度生まれ変わったら何になるだろうか？」と自問自答する事が多い！ これも楽しい！ 僕自身は、①飛行機のパイロット、②宇宙飛行士、③(何か学術的専門性を持って)南極観測隊メンバー、この3つから選びたいものだとか常々考えている(マタモヤ大爆笑！)。

<21>余生は翻訳家として？(笑)不死鳥の如く！

(1)現在の様にフリーランスで仕事する様になってから、40才前後のプロスポーツ、特に野球選手達のシーズンオフ動静にどうしても目が行ってしまう。「自分はまだまだ現役で Play 出来る」といくら言っても焦っても、(他)球団から **Offer** (需要)がなければその時点で選手生命は終わりだ。自身が「まだ現役で Play したい！」といくら叫んでみてもダメ！ 解説者やコーチの道(職)を斡旋される **Case** はまだ恵まれている方かも知れぬ。我々の場合もその立場は彼らに近い。「自分はまだまだ出来る！」といくら言ってみても～～！

(2)古い話だが、20代後半に同時通訳の学校(土曜日クラス)に1年間通学した。今でもそのカセットテープは保管している。中身は政治経済的な内容が主だった。素晴らしく、かつイヤと言う程勉強になった。この先更に年を取れば、海外 **Project** からお声も掛らなくなりそうだ、必ずや遠からずそうなるであろう。今、コロナ禍と相まってそうになっている！

(3)体が衰えたら昼間何しようかと考えていた矢先、某翻訳会社の募集記事を見た。過去の蓄積からこれもボケ防止(ボケ遅らせ!)には役立つであろうと思って、その翻訳会社に連絡を取ってみた。 **Trial** (試験)問題が送付され、中身の濃い内容を、必死かつ慎重に翻訳して納得

の解答文を送ったら Lucky にも合格し登録出来た。今回は英語とフランス語である。

(4)どの程度のお金になるのか分からないが、少し時間が出来たら本気で翻・通訳分野にも挑戦してみたい。何事もそうだが、したい事をせずに悔いを残すよりも、挑戦してみて失敗する方がマシだ。ついでに、川内、片平、青葉山時代、片手間とは言え、心血注いでメッチャメチャのめり込んだ(今風の表現ならハマッタ!)あのロシア語とドイツ語でも、少し小遣い稼ぎをさせてもらえぬものか? ロシア語では 20 代の頃、朝日主催の弁論大会に確か 3 回出場し、2 回入賞(5 位 / 3 位)した記憶あり。

<Final>「生涯現役」に向けて! : 人生110年時代の始まり

タイトルにも書いたが、(昨今新聞を賑わせている)「人生 100 年時代」に、勝手に 10 年追加して、敢えて「110 年時代」としてみた(大爆笑!)

長生きは誰でもしたいが、それにはお金も掛かりそう! でも時間を有効に使って、生き甲斐の追求、自己実現の達成等々、常に前を向いて生き抜いてみたいものだ。

「肉体が朽ちてからも精神は永遠に生き続ける! という、(公私とも散々お世話になった、あのイスラム圏の)コーランの教えや死生観が身に沁みるきょうこの頃でもある!

<完>